

セクレタリアト探しの旅で見つけたもの

錦岡牧場 岡本 吉史

今回の研修に向けて、予習用として『セクレタリアト』という映画を渡されました。この馬の圧倒的な強さを目の当たりにしながら、2つの課題が浮かんできました。①その強さの背景、②30年以上も記録を更新されていない理由を探ること。この2つを今回の研修のテーマとしてアメリカに向いました。

レキシントンでは、これまでのアメリカ競馬を背負い、これからを背負っていくであろう種牡馬と牧場の視察。どの牧場も管理が行き届いており、設備、スタッフの馬の扱い方もとても勉強になるものでした。

放牧地が傷んでいないのは1頭あたりの敷地面積が広く、土地を休ませるゆとりがあるからでしょう。雨が降っていたにもかかわらず、ライムストーンの上を覆う表土は浸水性がよさそうで、ぬかるむこともなく滑りにくそうでした。木柵は幅が2cm程度と薄いものですが、コールタールのようなものがべっとりと塗られ、広大な放牧地を統一された色で囲っていました。たまたま牧柵の建設過程を見学しましたが、縦杭の高さはまばらで、あとから頭を切っているように見受けられました。このほうが作業は速いのでしょうか。厩舎間を結ぶ通路にはゴム製のインターロッキングブロックがよく使われていましたが、ほかにもコンクリート、アスファルト、ウッドチップなどと多種多様であり、なかでもゲインズウェイファームではレンガを砕いたものを敷いていて、レーキできれいにならしているのが印象的でした。この牧場では毎年、放牧地の土を検査し、優秀な馬づくりに欠かせない栄養素が十分足りているように管理されているそうです。

牧場のスタッフの馬の扱い方はとてもやわらかく、チェーンシャンクの掛け方を馬によって変えているのも勉強になりました。特にレーンズエンドファームではカーリンが放牧地に入れ込んでいたにもかかわらず、スタッフの方が馬を落ち着かせながら一人で何もかもやっているのは素晴らしかったです。馬房で手入れするときに馬を繋ぐリードは、馬がいても馬房の中に掛けたままのところも見られましたが、よく馬がいたずらしないものだと感心させられました。

いろいろな牧場で見せてもらった種牡馬たちは血統のパズルのようであり、最初の1ピース1ピースをどこに当てはめればいいのかわからず気後れしていましたが、牧場視察の最後には、散らばったピースを少しずつまとめることができ、全体像がうっすらと見えてきました。日本に帰国してからも血統の歴史というこのパズルの絵を完成させる作業を続けていきたいと思えます。

偶然、時間の都合でパリスのサラブレッドセンターの厩舎、調教馬場を訪れましたが、アメリカの牧場は広大で清潔で豪華というステレオタイプなイメージを払拭してくれまし

た。しかし、ここから名馬、名調教師が出てきたのかと思うとアメリカ競馬の奥の深さ、層の厚さを実感しました。

研修後半はロサンゼルスに場所を移してのブリーダーズカップ観戦。今回ブリーダーズカップが開催されるサンタアニタパーク競馬場は、シービスケットが引退レースでサンタアニタハンデキャップを勝った競馬場で、その4年後には1万7000人近くの日系アメリカ人が第二次大戦中に馬房に強制収容された場所です。昨年まで馬の脚にはよいとされているオールウェザー馬場でしたが、水はけの悪さのためダート馬場に戻されてから初めてのブリーダーズカップ開催となりました。1日目土曜の6レースと2日目日曜の9レースのブリーダーズカップの総合賞金は2,500万ドル（約20億円）を超え、15レースのうち13レースがG1に格付けされている競馬の祭典です。カテゴリーが分散されたことにより、各レースの希薄感はありませんが、週末の2日間に何度もG1レースを見られるというのは、競技性よりも娯楽性を重視したお祭りと呼ぶのにふさわしく、観客は紫のテーマカラーで着飾って歓声をあげていました。

最低でも1000円ちかくする入場料、個人所有の競馬場、種牡馬のオーナーたちや出走登録馬もお金を出し合い、海外のブックメーカーと提携しながらも、馬券の売り上げの向上に努力を注ぎながら運営しているブリーダーズカップはスポーツ観戦に近く、日本の地方競馬や中央競馬で見られるレースの雰囲気とは一風変わっていました。

多様化された馬券の発券方法にもいろいろな工夫が随所に見られます。なかでも50セントからでも買え、3レース連続で勝ち馬を当てるピック3という馬券は、連日第1レースから毎レースごと始まっており、これを目的に早いレースから入場するお客もいるのではないのでしょうか。しかし、何より購入意欲を駆り立てるのは種類豊かな発券方法だけではなく、その高い還元率です。州によって違うようですが、カリフォルニア州ですと単勝、複勝で84%の還元、その他の馬券でも約78%還元となっているので、人気馬の単勝でも驚くほど配当が付きます。ブリーダーズカップをそしてアメリカ競馬を、よりよい方向に持っていきたいという関係者たちの努力を垣間見ることができて、その場にいることによって心の底から競馬を楽しむことができました。

今回はセクレタリアトを追い求めての旅でしたが、クレイボーンファームにあるお墓やケンタッキーホースレーシングパークにある銅像として歴史に残っているだけでなく、ブリーダーズカップマイルを勝って、アメリカ年度代表馬の有力候補となったワイズダンの血の中に脈々と生き続けているセクレタリアト（祖母の父）の名前を見つけ、アメリカ競馬の歴史の断片を目撃することができました。セクレタリアトの強さの秘密は、人と馬によって受け継がれてきた歴史と努力が偶然セクレタリアトという名馬を産み出したのではないのでしょうか。セクレタリアトから30年、そのレコードを破る馬を生産することは未だ果たせていません。結局、人が馬を速く走らせるのではなく、速く走れる馬が出てくるまで競馬、馬、牧場をより良い方向にサポートし続けていくのが私たちの役割なのではないのでしょうか。いつの日かセクレタリアトのようにあとあとまで語り継がれる馬が生産され

るまで、厩舎、牧場を清潔に保ちながら、ホースマンとしての自覚、ファンの人たちとの交流の大切さを身にしみて実感できた研修でした。

最後に、日本競馬協会様、土井社長ご夫妻、添乗員の鈴木さん、そして今回の研修で寝食をともにしたメンバーの皆様、この研修で貴重な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。